

巷にあふれる薬は治しているように
見せかけているだけです。

「明日に向かう」 匿名希望 51歳

2017年5月22日

整形外科に通院していた時、体中に出来た赤い湿疹を爪の先で軽く搔きながら主治医に「このまま、咳や湿疹が酷くなったら私は、どうなるのですか？」と聞いてみた。「うん。そりゃあ、入院やな。」簡単そうに言われた。簡単に聞こえるものの意味は簡単ではない。「ここに来るのは、今日が最後だ。」と、2年近く通った整形外科を後にした。

子どもが生まれて暫くしてから両手の強張りが起こった。初めはその強張りも数時間で無くなっていた。しかし、月日が経つごとに症状は悪化していった。子どもが保育園の年長さんになる頃には、抱きしめる事は出来ても抱き上げる事が出来なくなっていた。両手は力が入らないだけでなく、痛みも強くなっていった。そんな時、友人から「今は、リウマチの薬も新しいのが出て、良くなっているらしいよ。」「変に我慢しないで、お薬飲んだら楽になるよ。」と言われた。病院で出されるお薬は、友人の言った通り、数日間にして私の生活を元の元気な頃に戻した様に見えた・・・。

お薬の開始から1年が過ぎた頃からだろうか、抜け毛が増えた。腕と胸元には赤い湿疹が出来た。少しの恐怖を感じながら、それでも痛みと向き合う怖さの方が大きく、お薬を飲み続けた。お薬開始から1年半後には、風邪でもないのに咳も酷く、夏場であっても寒く感じる程に体温は下がっていた。両手の痛みは全く無いのに「助かった。治った。」と思えないのは何故だろう。それよりも、このままでは、私は壊れると思い始めた。自分の将来に不安を感じ、これから先を問う私に、入院をサラッと告げる医師には何の信用も持てない。貴方にとっては、沢山の患者の中の1人であっても、私の家族にとっては必要とされている人間だ。リウマチに関係する病院を必死に調べた。何処も最新医療や最新薬の情報を謳っている。そんなものいらない。パソコンの画面の中に「免疫を上げて治療 松本医院」の文字を見つけた。その時の嬉しかった気持ちを今も忘れない。難しい内容は解らない。けれど、本物だと感じた。

元気にハツラツと仕事をしていた20代、30代。自然治癒力や免疫力に興味を持ちあらゆる書物を読み勉強した頃を思い出した。巷にあふれるお薬が、治しているように見せかけて誤魔化す物だとわかっていて、試した自分を反省

した。家族と自分の将来を守る事を自分自身と約束した。

2013年、11月。松本医院の診察券を持つ事になる。当時の私の血液検査の値は、勿論よくない。なかでも、肺サーファクタントプロテインAの値は89.2と正常値の2倍だ。間質性肺炎へまっしぐらと言う訳だ。整形外科で出されたお薬のダメージだと院長は教えてくれた。その通りだと思った。漢方薬を煮出して飲む生活は、今年の秋で4年になる。血液検査の値は、少しずつよくなっている。家事も仕事もどうにか出来ている。ここまで来るには勿論、辛い時もあった。整形外科のお薬のリバウンドも出て不安になった事もある。でも2度と誤魔化しの治療はしない。松本医院と自分の免疫のみを信じて痛みと向き合った。

今でも、両手首が腫れる日や痛みがある日もある。しかし、それも毎日ではないし、何より先の見えない恐怖は無くなった。「おはよう・おかえり・ご飯できたよ・いただきます。」私は、家族に向けて言うこの言葉が好きだ。そして、「ただいま・ごちそうさま・おやすみ」の家族からの返事も大好きだ。これから先も毎日毎日、この言葉を繰り返したい。先日ニュースで「今年の夏は暑い」とキャスターが言っていた。「暑いね」と言いながら、家族でアイスでも食べようかと想像できる今を有難いと思っている。もうすぐ、松本医院に行く頃だ。リウマチとの闘いは、まだ暫く続くだろうが明るく受け止めている。

松本先生。信じられる医院に出会えた事に感謝しています。これからもどうぞ、よろしくお願いします。





